

## 言語学者が詩人と向き合う時 : J. R. Firthによる Swinburneの詩の分析

坂本, 勉  
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 教授 : 言語学

<https://doi.org/10.15017/7665>

---

出版情報 : 文學研究. 103, pp.75-81, 2006-03-31. 九州大学大学院人文科学研究院  
バージョン :  
権利関係 :

# 言語学者が詩人と向き合う時

—— J. R. Firth による Swinburne の詩の分析 ——

坂 本 勉

詩人を良く理解する者は、詩人をおいてないのです。

(Swinburne に宛てた Baudelaire の書簡より)

1863年10月10日付、阿部良雄訳)

ロシア出身の言語学者 Roman Jakobson (1896-1982) の詩学研究は広く知られており、優れた解説書も多い<sup>1</sup>。しかしここでは、従来それほど注目されることのなかった研究を紹介することにしよう。イギリスの言語学者 John Rupert Firth (1890-1960) は、ヴィクトリア朝の詩人 Algernon Charles Swinburne (1837-1909) をとりあげ、コロケーション (collocation) という「分布の原理」に基づく手法を用いて、その詩語の世界の記述を試みた<sup>2</sup>。ではその記述は具体的にどのようなになっているのかを簡単に見ていこう。まず、'Before Dawn'からの次の詩句。

Delight, the rootless flower,  
And love, the bloomless bower;  
Delight that lives an hour,

<sup>1</sup> 山本圭一(1989)『ヤコブソンの言語科学1 詩とことば』東京：勁草書房

<sup>2</sup> Firth, J. R. (1957) *Paper in Linguistics, 1934-1951*. London: Oxford University Press.

And love that lives a day.

ここでは、統合的(syntagmatic)に平行したコロケーションは詩行形(verse-form)や詩連形(stanza-form)のひとつの特徴であり、韻律的特徴をなしていると Firth は述べている。つまり、Swinburne の詩は、平行性というひとつの特徴を持っているということである。もっとも、平行した詩行の連続によって詩を創る事は、ごく一般的な作詩法であるから、Swinburne にのみ見られる特徴というわけではない。むしろ、詩の言語そのものにとって、平行性(あるいは、繰り返し)ということが重要な特質であると言うべきかも知れない。

Firth は次に、Swinburne の詩に現れる音声的特徴に目を向ける。‘Quia Multum Amavit’からの下記の詩句において、*str-*という頭韻の連続がひとつのコロケーションを成すと述べられている。

Ah the banner-poles, the stretch of straightening streamers  
Straining their full reach out !

こうした特徴的な音の出現は、詩行内の語の推移において主導的な韻律を形成し、音美的(phonoaesthetic)なレベルにおいて、ある意味を表示しているとされる。「音美的」というのは Firth の造語で、音と個人的・社会的態度との関連を述べたものである。一般に英語においては、*str-*で始まる語は、*long, lengthening, straight, stretched out* という特性をもつ現象に言及するという状況で用いられる。そしてまた、力強く真っすぐに伸びていくような活動と共に用いられる。よって、*str-*の連続によるコロケーションは、英語文化圏において、このような音美的意味を持つということになる。この音美的意味は、こうした状況の文脈(context of situation)において解釈されるという点に

において、オノマトペや音象徴 (sound symbolism) などとは異なる。

Firth はさらに、Swinburne の詩に特徴的な、ある種の意味的コロケーションが現れるとして、それらを9つにまとめて論じている。ここではその内の4つを取り上げて示してみよう。

- (1) 関連した語のグループの中に類似した特徴が見出され、多くの対立し、交錯した対照が見られる。

Till life forget and death remember,  
Till thou remember and I forget.

- (2) ひとつのコロケーションにおいて、対極的な意味をもつ語が幾重にも積み重ねられている。

... freedom clothed the naked souls of slaves  
And stripped the muffled souls of tyrants bare.

- (3) 意味的に対立するような特徴を持つ語が平行して出現する。

Till day like night were shady  
And night were bright like day;

- (4) 同一の基底形から派生した語がひとつのコロケーションの中で用いられる。

... for a little we live, and life hath mutable wings.

ここで例示したものは、Firth が挙げたものの一部であるが、Swinburne の詩の世界の特徴を示すには十分であろう。相反するもの、例えば、'life-death', 'night-day'などが共起する。ここでは、対照 (contrast) と一致 (concord) とがひとつのものであり、対立 (contrary) は神聖なものであると Firth は述

べている。

さて、上で見たように Firth は、あるテキストを分析する手法として、コロケーションという概念を提案しているのだが、ここまで十分に説明してこなかったのが、少し解説を加えたい。コロケーションによる意味の定義は、統合的なレベルにおける抽象化の結果であって、語の意味に対する概念的・観念的アプローチとは直接的には関係しない。例えば、‘ass’(ロバ)という語は次のような文脈の中に出てくる。

- (i) An ass like Bagson might easily do that.
- (ii) He is an ass.
- (iii) You silly ass!
- (iv) Don't be an ass.

このように、‘ass’はそのすぐ前に *you silly* が付いたり、呼びかけの語やある個人を指す語句を伴ったりする。また、先行する形容詞には制限があり、その主なものは、*silly, obstinate, stupid, awful* などであり、時には *egregious* も用いられる。*old* よりも *young* の方がよく用いられる。複数形はそれほど一般的ではない。‘ass’という語がこうした慣習的なコロケーション (*habitual collocation*) で用いられるということ自体がその意味のひとつであると Firth は主張している。これはもちろん、‘ass’の連想的な意味や、暗示的な意味などと呼ばれるものであるが、要点は、このコロケーションによる意味が「分布の原理」から導き出されるという点であろう。こうした分布の特性は、全ての言語に見られるものであり、十分に確立され習慣化された、音声的・音韻的・文法的な形態がこうした分布の基盤、すなわち、「文脈」を与えることになる。つまり、言語的な形態を明らかにするには、そのコロケーションの解明が必要となる。同様に、特定の文学形態、ジャンル、作家を研究

するためには、コロケーションの考察が不可欠であると Firth は主張する。では、その文脈的意味について少し考察してみよう。

Firth (1957: 190) は「意味」という語の用法について次のように述べている。“The use of the word ‘meaning’ is subject to the general rule that each word when used in a new context is a new word.” 語の意味が新しい文脈ごとに異なったものになるということは、言語表現の意味はその表現自体によってではなく、周りの環境によって決定されるということになる。言語事象 (language events) は話をする人間の創造的行為によって形成されるものである。よって、“Whenever a man speaks, he speaks in some sense as a poet.”ということになる (ibid. 193)。詩人として話をするということは、つまり、常に言語表現に新たな意味を与え続けているということになるわけである。

このように、ある言語表現は、常に新しく創り出される文脈の中においてはじめてその意味を獲得することになる。そこで、Firth の意味論は言語表現を文脈に関連づけることを目的とすることになる。文脈的意味とは、最終的には、文化の文脈 (context of culture) に対して言語が持つ機能的関係のことである。ただし、文化の文脈に至るまでには様々なレベルの文脈がある。それは、ある文が発せられる時の社会的・個人的な「状況」の文脈、ある語の意味を決定する「文」という文脈、ある音声的・韻律的情報が埋め込まれている文脈などである。例えば、アメリカ人がある種の話し方をするということは、その人物の音声的な意味のモード (phonetic mode of meaning) の一部であり、それはまた、アメリカ人であるということの意味の一部 (part of the meaning of an American) でもあると Firth は述べている。

では、Swinburne の詩をより高次の文脈に置くということは、詩人の伝記やその時代の歴史的背景などを考慮しなければならないということ

なのであろうか。あるいはそうなのかもしれない。Firth 自身はそれを否定はしない。しかしそれは文学史家の仕事であって、言語学者の仕事ではない。いくつかの詩句を基にして、ある種の「詩人の哲学」といったものを他の表現で表し、それを Swinburne に帰せしめること、つまり、Swinburne の詩の哲学を論ずることも言語学者の仕事ではない。また、言語学者の仕事は、審美的評価や文学的評価を企てるものでもない。言語学者の仕事は、言語学的な観点から Swinburne の詩語を研究することにより、その平行性・音的特徴・意味的特性などを示し、「Swinburne 語」とでも呼ぶべき個人語 (idiolect) 的な特徴を明らかにすることである。それは、あるひとつの言語の音声・音韻・文法的な形態を記述していくことと同じである。つまり、Swinburne 語という未知の言語の特徴が記述されていくのである。Swinburne の詩の評価でもなければ、その批評でもない。Swinburne 語とはどのような言語なのかを明らかにすることが Firth の目的である。この目的は、文芸批評などの用語は一切使用せずに、また、伝記的背景などに言及することなく達成されるのである。

では、詩人と向き合う時の言語学者の仕事は非常にストイックなものであるということであらうか。ある意味そうであらう。しかし、Swinburne の詩の言葉の意味は、Swinburne の詩の中にしか存在しないというのは至極あたりまえのことである。Swinburne の詩を理解するということは、その詩を「Swinburne 語」というひとつの言語の中に置いて見るということである。例えば、「英語」という文脈では、'night' の意味のひとつは、それが 'dark' と共起 (collocate) するということであるが、「Swinburne 語」という文脈では 'bright' と共起する (And *night* were *bright* like day)。当時の文芸評論家は、こうした撞着語法を単なるレトリック (mere rhetoric) であり、無意味 (nonsense) であるとしか見ていなかったと Firth は述べている。そうした的外れの批評が出てくるのは、「Swinburne 語」という文脈全体の中において詩句を理解していないからである。例えば、ある人が「生きているか死んで

いるか」はどちらか一方の状態が選択されるのであって、両方を結合して「この人は生き、かつ、死んでいる」ということはナンセンスである。しかし、このような現実世界の桎梏を超えて、「Swinburne 語」においては、様々なイメージが自由に結びつく世界が語られるのである。Swinburne という詩人が語った言葉を理解しようとするれば、「Swinburne 語」の辞書と文法書が必要不可欠である。言語学者が詩人と向き合う時、彼はひとつの未知の言語に向き合うのである。